氏　　名	河野　美奈子
学 位 の 種 類	博士（文学）
報 告 番 号	甲第４３６号
学位授与年月日	２０１６年9月１９日
学位授与の要件	学位規則(昭和２８年４月１日文部省令第９号) 第４条第１項該当
学 位 論 文 題 目	マルグリット・デュラスと仏領インドシナ――自伝的作品における仏領インドシナ表象とその書き換え――
審 査 委 員	（主査） 小倉　和子 澤田　直 小川　美登里（筑波大学人文社会系［文芸・言語］准教授）

Ⅰ．論文の内容の要旨

（１）論文の構成

序論
第 1 章　『フランス植民地帝国』とデュラス
第 2 章　植民地主義批判と『太平洋の防波堤』
第 3 章　真の自伝的作品としての『愛人』
第 4 章　最後の作品『北の愛人』
第 5 章　仏領インドシナを表象する女乞食
結論
参考文献
仏文要約
補遺「マルグリット・デュラス著作解題」

（２）論文の内容要旨

本論文は、マルグリット・デュラス（1914-1996）の自伝的作品を中心的にとりあげ、彼女が 18 歳まで過ごした仏領インドシナと自身の作品との関係を探る研究である。

まず第 1 章「『フランス植民地帝国』とデュラス」では、デュラスが作家になる前、フランス植民地省に勤務していた 1940 年に、上司と共同執筆した展覧会のカタログ本が紹介される。次の第 2 章「植民地主義批判と『太平洋の防波堤』」では、デュラスの初の自伝的作品である『太平洋の防波堤』（1950 年刊）が、『フランス植民地帝国』との関連性において論じられる。つづく第 3 章「真の自伝的作品としての『愛人』」では、『太平洋の防波堤』から 34 年後に書かれた作品（1984 年刊）において、少女時代の記憶がメコン河の雄大な流れと溶け合って絶対的なイマージュを獲得するに至る過程が分析される。さらに第 4 章「最後の作品『北の愛人』」では、『愛人』の映画化に際して晩年に書かれた本作（1991 年刊）において、これまでのインドシナ連作がどのように書き換えられていったかが検討される。最後の第 5 章「仏領インドシナを表象する女乞食」では、姿や性格を変えながらインドシナ連作のあいだを横断してきた物乞い女の人物像の象徴的価値が考察される。

以上の結果、これまで注目されることの少なかった『フランス植民地帝国』とデュラスののちの作品とのあいだには密接な関係があること、また、類似のテーマが書き換えられていく過程でのエクリチュールの変容が明らかになった。

Ⅱ．論文審査の結果の要旨

（１）論文の特徴

本論文は、これまで作家自身によっても、また研究者のあいだでも、顧みられることの少なかった『フランス植民地帝国』とデュラスののちの作品＜インドシナ連作＞が一体のものとして読解できる可能性を示したものである。デュラスは作家としてデビューする前のフランス植民地省勤務時代、1940 年 5 月に開催された第 2 回フランス植民地サロンに際して、上司とともにカタログ本の執筆にたずさわる。フランス植民地帝国が一つになることを求められていた時代に、フランスを礼賛する目的で書かれた本書が、逆説的ながら、デュラスの書くことの原点になる。本論文は、このカタログ本と、インドシナを舞台として植民地批判の立場から書かれたのちの自伝的作品とのあいだに密接な関連があることを主張し、それらを一体的に読解するものである。

また、父の死や母の経済的困窮ゆえに白人社会にも、現地人社会にも帰属意識をもてぬままにインドシナ内部で異なる文化圏のあいだを移住し、フランスに完全帰国してからも「よそ者」の意識をぬぐいきれなかったデュラスが、書くことを通してどのように自己を発見し、記憶の中のインドシナを時間の経過とともに再構築していったかを、1950 年に発表された『太平洋の防波堤』、1984 年発表の『愛人』、1991 年発表の『北の愛人』の 3 作品の読解を通して考察したものである。

（２）論文の評価

デュラスは『愛人』でゴンクール賞を受賞したために、生前はエキゾチックな土地を描き、金銭を前提とした少女と青年の恋愛関係を小説の前面に出すスキャンダラスな作家とみなされることも多かった。近年そのような見方は修正されつつあり、『フランス植民地帝国』とデュラスの特定の作品との比較研究もいくつか発表され始めている。しかし、『フランス植民地帝国』と＜インドシナ連作＞を全体として取り上げ、デュラスの実人生と密接なつながりのあるテーマが、時間とともにどのように彼女の作品世界の中で変遷していったかを論じたものはまだない。その点で貴重な論考であり、高く評価できる。

また、話者やその愛人、家族などの主要人物だけでなく、姿や性格を変えながら常に登場し、作品間を横断する興味深い脇役である物乞い女の表象にも注目し、デュラスのアジア世界を体現するこの人物によるアジア踏破の意味を探る最終章は、やや精緻さに欠けるものの、きわめて意欲的であり、今後のデュラス研究にたいする示唆に富む部分として評価できる。